

おへおもい。北に南のあんちきつたまへりタボルレルよりあんちの名によりて置ひよば
の大能のみうでをあらわす。なんぢの手うつべ汝のみきの手うたかし。義と公平のくら
の九十九。おはれみく眞實との聖頭のまへにあらわれく。よらてびの音をえる民うらじひあり。
本よりかれらみかほの光のあかじめり。かれらる名によりて終日よりうて。あんぢの義によりて
高くわげられたり。かれらの力の榮光。あんぢあり。あんぢの恵に。よりてわれらの角へかげられ
ん。うわれらの眉ひ。ホバに屬われらの王ハーヴェルの聖につけり。うのくさ聖象をみてあら
ム詩四八九〇三王上十〇。の聖徒につげたまく。われ依頼はからむるのに委ねたり。わが民のあかじり。一人をえらびて高くあ
りけり。わざわが僕ダビドをしてために。聖骨をうしひ。わの手つかぬてかに墜へわの骨ひ
強くせん。相かみどへたぐもこそあし惡の子。かきも告し。わきかきの前にうのうち
あらの敵をたゞ彼をにへらめのや聲。ハリとわの眞實とわ隣接のふぶに居りわの名。
カル詩四九〇六七〇。の御前。手すくひの玉あらわす。わきかきの手を河のうへにあ
かんタビ元我おひひて汝のわ。父わ神わすくひの玉あらわす。わきかきの手を河のうへにあ
じの王たちのうち最もかき者たがん。ハリとわに隣接のふぶに居りわの名。
かくするてあかもへど。元わきまよたの衛までしてこしへに宿へるのへらある天の日標のぐとくがくへ
こしへにつかく。の座位の日。このごとく恒にうの前にわらん。また月のぐく永遠にたてらゆる空にあ
ひおより出しつかく。じ。わきまよた馬鹿をらぶて。うの首を

の子おとこよあんちあら歸かへりて、あんちの目前まくはかのめは、すくの昨日きのうのとくへ、たの後間のちまのひのとくへお

あじあんちてれらを大水おほみずのとくへ流去ながれしめたやふ。かれらは一夜の寝ねのとくへ朝あさにはえらづる青草せいぐさ。

のこどもして勵さなづかめじとみのうの去いそへてわかれらもまた飛去ながれり。誰だれかあるの語ごもてこらへた勵さなづかめじとみのうの去いそへて智慧ちゑのこゝらを信しんじめたよへ。エホエホよ歸かへりたまへ斯すでいく。

息いきのこどもしてわれらが年としをふるひなせば、七十歳しちじさいにすます。あるひ壯さうやかにじて八十歳じゅうじさいにいらたらん。されどう

なんの怒いののよからず。やれたれか汝汝をふるもレ張ぱにたべらへて汝汝のいさとくいさとくはりにわのが日ひをかぶふることをぞして智慧ちゑのこゝらを信しんじめたよへ。エホエホよ歸かへりたまへ斯すでいく。

うのとくを歴へりたまふや。ねのはへひ汝汝の身みも人ひとに係かかりるみてしらを變かへたまへ。ねがはくか廟廟にわられら

るの日ひとわきらの神かみにかくらの神かみ害がいにかくらの神かみ害がいにかくらの神かみの年としとかくらへて我わ體たいをたのしませたまへ。あんちの

作さく爲ためをあんちの僕僕等らにあんちの榮光えいこうをうの子こ等らにあらはじたまへ。エホエホよ歸かへりたまへ斯すでわきらの神神エホエホの佳美かびをわ

るのうへにひづづじめ、わきらの手てのあやわらのうへに離はなからしめたへ。願ねがくわきらの手てのわ

を離はなからしめたよへ

第九十一篇

第九十二篇

安息日やすみにもちゆる歌うたなり讚美めいめいあり

いとたかき者ものよエホエホにかくらやし理名りめいをほめたへるの書かあ。あしれに汝汝のらつへへてみぞやらし

し役わざをあんちの眞實まことせわらはすに三十歳じゅうさいのめりの筆ひをあちる琴ことの妙めうある音おとがめうるものいと善よか

ありのエホエホとあんちの作さく爲ためもて我わをたのしませたまへ。我わならちの手てのわがよろこびはこれ

ん五エホエホより汝汝のみわみれ大おほかるかあ。汝汝のものかのうへ思念おもひいとふかし無知むち者の心こころがるて

第九十五篇

おはしめからざるの惡き事のなかに滅したまへん。わらの神ホルムがこれを滅したまへん。
 に定む然のあれどホルムのたかさ極ホルムのわらの神ホルムのかれらの邪曲ホルムの身ホルム
 かる悪の位ホルムなんちに頗ホルムひことむ得ホルムやホルム彼等ホルムのあひからひて義人ホルムのたましをせめ罪ホルムなき血ホルムつみ
 これがうちに憂慮のみつる時ホルムなんちの安慰ホルムのたましを喜びホルムせたまふ。律法ホルムもして售ホルムしてを
 どちらに住ひしならん。さればわの足すへりぬにひじくホルムふくらの懣懃ホルムわれぞひへたまへ
 ためて不義ホルムをあこなふ者ホルムせめんや。もしホルム我ホルムをたすけたましをせばわが靈魂ホルムとくに幽滅
 り心のあはき者ホルムみあうの後ホルムにあたがん。誰ホルムかわのために起りたましを思ホルムものを責ホルムんや。それか我ホルムが
 かくし人ホルムやわみひひの日ホルムよりのびきしめ悪ホルムものホルムために坑ホルムはらもとせでこれに平安ホルムをあたへた
 成ホルムしふる者ホルムたすこてわ爲ホルムらんや。人に知識ホルムをわふる者ホルムきこてなからんや。エホルム人の思念ホルム
 からん。みホルムを植ホルムるものへてこさせざらんや目ホルムにつくれるもの見ることをせざらんや。もう一の國ホルム
 ロホルムの神ホルムみホルムらんや。民ホルムのなかな無知ホルム。なんらひどけれ思ホルムかなる者ホルムひつれの辺ホルムにか
 のいふ。かく入て不義ホルムをあこなふ者ホルムみホルムから高ぶれり。エホルムかくらふ。彼等ホルムあんちの民ホルムをうらへだま。なんら
 きを經ホルムてすが。かしけの勝論ホルムてらへひのうじを經ホルムるや。かれらホルムだまに言ホルムをいたして説ホルムりも

第九十四篇

エホルムあよ仇ホルムをかへす。汝ホルムにわリ神ホルムよめたを報ホルムす。不くらにや。ねらべの光ホルムはあらたまへ。世ホルムを
 おはたまふのよ願ホルムく。起ホルムてたかぶる者ホルムにうのづくへ。さ報ホルムをなじたまへ。チホルム思ホルムの幾ホルムのどの
 とかたし。エホルムよ聖潔ホルムのなんちの家ホルムをこじへ。ひでも適應ホルムなり
 ハの高處ホルムにひしての威ホルム。おほくの水ホルムのこゑ海ホルムのかくへにゆびて盛んホルムあり。あんちの諱詞ホルムの
 しより在せり。大水ホルムこゑじわげたり。エホルムはみづの聲ホルムをわびたり。おほみづの浪ホルムをあへ
 ればまた世界ホルムもかくたてて動かぬ。エホルムかくの寶座ホルムにじへり。アホルムかくたぬ。汝ホルムうこ
 イホルムかくの統御ホルムたまふ。エホルムかくの威ホルム。威ホルムをたまへり。エホルムかくの能ホルム力ホルムこらめぬ。御ホルムててめぐらへり。アホルムかくの能ホルム力ホルムこらめぬ。御ホルムててめぐらへり。
 第九十三篇
 タヨホルム中庸ホルム十日四
 大庭にはかえん。かまらひ年老ホルムてあほ果ホルムをもす豊かにうるほひ緑の色ホルム。アホルムの直ホルムきもの
 横ホルムの樹ホルムごくく葉ホルムえられ。アホルムの香相ホルムごくくだつへし。エホルムかくの宮ホルムにうづらひ。じものわられるの神ホルムの
 見わが耳ホルムにひからひてあこりたつ惡ホルムや。神ホルムへりたつ惡ホルムや。又ホルムわの仇ホルムにうつて願ホルムへててくを
 ごそへおらしめたまへり。我ホルムうわたまホルム。又ホルムわの仇ホルムにうつて願ホルムへててくを
 仇ホルムはろびん不義ホルムをあこなふ者ホルムこくへ散ホルムはれん。ひれど汝ホルムの角ホルムをたかくあひて野ホルムの牛ホルムの
 へにほらびん。アホルムは汝ホルムよ法ホルムにこへに高處ホルムにゆじませり。エホルムかくの仇ホルムの仇ホルムの
 もの之をひらす。惡ホルムの草ホルムのへもえり。不義ホルムをあふ黒ホルム。ひかゆくのくぼも遠ホルムに。じし

聖哉われらエホビにかひてうたひ、^レすくびの樂にむかひてよらこじき聲をあひんわきら感言とす

てうの前ゆえホビにむかひ歌をもて歎かじきておもひびん三

の神にみさむる大なる王なり田地のふかき處み不る手にわら山のいたらまくわだ神のものあり

の神のものうの造りたせんとじう早ける地もやたうの手にて逆りたまへり六

傍をつくる主エホビのみせへに曲蹴へし彼のわらの神ありわれらなり草苑の民うの手のひ

つじあり。今日あんちらうの聲をきかんこじをの不ひ、^レあんちらメリに在しゆのひく野ある

サにありし日の如くうの心をかべておにするなけれるの周なんらの列祖われてこらみ我をためし又

ねがわざをみたり。+われらの代はよじれひて四十年を歴。われらへりかれらうらわやれる民わ

道を知りしとこのゆゑに我がきど娘て彼等のわの安息にいらも入からずと書ひたり

ム。第十四回二七

イ。世三十六三三三三詩

一あたらし歌歌をエホビにむかひてうたへ全地エホビにむかひて謳ふへじエホビに向ひてうたひ

るの名をめよ。日ごとにうの聲の入たへよもらくの國のなかみるの樂光をあらわし。あらく

の民のあかにうの奇しひみわび歌すへしる。エホビのおはいなり大にほめたしよへ入るの本、

らあるの神にせひりて畏も入るのあり。アーベの民のすへに神のこじへくへ虚なじ。されどエホ

の民のやから樂光をかからせどエホビにわたへよエホビにわたへよりの聖名にかなふ樂光をもて

盛るめぐらすりてみほり田畠の中のすへに物のよひふりふり。かへて林のめぐらの樹もあ

あるじ。エホビの正直とみせん人の民をみせんはんじて天つからび地のじみ海のじみ海のあかに

たエホビの前にようてびらたせん。エホビ來りたまく地をびせんとて水りたまく義をもて世界ど

カ詩三十七〇闇十九

第一九十七篇

エホビの眞實をもてみらくの民がじたまく

かでホビ世界をてらす地を見てびる。五
ホビの山。エホビのみゆく全地の主のみゆく
あいかから世界をかく。ホビの天のうの義をもじらじ。スの民のホビの樂光をもじらじ。アーベの
公平の寶座のまゆめり。火をもみせんてすまみの四周の敵をわりへす。エホビ

ホビの誠實たまく全地のじみくの島々へてふへじ。雲をもみゆるの周環にあり議

成ふをがめ。エホビの誠實のゆがてふへじ。オレはレモテビタの女輩のみ樂しめり

ねる像につか。虚じゆの内とてみゆくから話がみの取戻をうくへじ。アーベの神がみホビ

かでホビ世界をへてけぬ。ホビの天のうの義をもじらじ。スの民のホビの樂光をもじらじ。アーベの
ホビの山。エホビのみゆく全地の主のみゆく

あいかから世界をかく。ホビの天のうの義をもじらじ。スの民のホビの樂光をもじらじ。アーベの
ホビの山。エホビのみゆく全地の主のみゆく

かでホビ世界をてらす地を見てびる。五
ホビの山。エホビのみゆく全地の主のみゆく

ホビの誠實をもてみらくの民がじたまく

いだじたまふ。光がたらじ人のためにかれ欣喜してう直きものとために播れたり。穀人よエホ

によりて喜ぶ。うの誠實をもてみゆくに感謝せり。

カ詩三十九〇闇三〇

第一九十八篇

自十至九十七篇十二節

の神エホバを崇めるきよき由にてぞ、みせつれ、うひこれららの神エホバの聖なるあり
第一百篇 感謝のうた

全能よりエホバにむかひて歡喜をあげよ、歎喜をいたきてエホバに事へ、うたひつゝるの前
され三知れエホバの神にまづなれ、われらを造たまへものうエホバにゆんぜせべ我神のうの属なり、
われらの民の草庵のひじなり。感謝してしるの門にたり、ほめたまへしるの大庭にいれ
しでるの名をばたまへよ、エホバがみくらの眞實より世におよぶ人
第一百篇 感謝のうた

けれなり

一われ體假に無拘とをうたせ、エホバよ我なんちを讀うたせ、エホバ心をせぐべして全道をゆもら
ん、なんちうれの用わにまつたまふや、我は心やめてわの家うちもありかん。われわが耶前
にいやしき事をもかず。われ類くもの業をくひ。うのわびう我につかじ、解めてしらひ我よりすな
れもし惡きものを知ることをこのやす。五ひそかにうの友をうしるもの我これぞはうばん高公る眼また
驕れる心のもの我これぞの心じ。六眼の國のうらの忠なる者をみて之をわれどとも住ません。
全き道をあゆむ人のわれに事へん。七かくこそをす者のわの家のうちにはすひてす虚偽をいふのみ
りわの目前にたつてきを得じ。八われ朝不くこのく國のあしさ者じこと、今く滅じ。エホバの口より不義を
ふこな入者をこしべく絶隔かん。

ために來りたまへあります。エホバ義をもて世界をひいて公平をもてあらへの民をひきだせばなん
大水の手をうちみづへ山うわひもかはる前にころこびたまへし。エホバ地をばかん
のみまへによつてはじま壁をあひよ浦をうちの世界とせからにすひもの隣壁もへじ
ヘ琴じてもエホバはめうたへ琴の音と歌のてゑをもてせよ。ラバの角笛をふはるがらし王エホバ
神のすくひを見たら全地よりエホバにむかひて歡びま壁をわげよ牆をはおがてよらこびたへ讀うた
はし繪へり。又の懸懶と眞實をイヌラの家にひかひて記念じたまふ。地のねじくへわ
のために敵をし畢たまへり。エホバのすへひをしめ。うの義をもらへの國人の目のまへにあ
あたらし歌をエホバふむかひてうたへ。うの妙ある事をふつあひの右の手のひよ脚をもてて已
本第十九篇

タルス代爵五十九年十月廿二日第十五章
本伯廿六里七
四月廿九日廿九日第十五章
本伯廿九日廿九日第十五章
七ヨアの家から祭司の家カム一セアロヤウア。の名をよふ者のあかにサムエ
耶利五十一年十二月廿九日第十五章
本ハシオニゆくして大あり。うの民にすぐれてたふじ。三かれらの汝のあはがる長るべ
き名をばたまへじ。エホバの聖あるから。王のから審判をこのみたまふ。汝のかく公平をたて
ヤコブの家から祭司の家カム一セアロヤウア。の神エホバをあがめ。うの満足のもとにて垂み
まつれ。エホバの聖あるから。の祭司の家カム一セアロヤウア。の名をよふ者のあかにサムエ
ルや、かれらの語詞じうの語詞じうの語詞じうの語詞じうの語詞じうの語詞じうの語詞じうの語詞
たり。かれらのあじ事にひいたまひたれをまた教をわたへる神にてくませり。われら
たれ三知れエホバの神にまづなれ。われらを造たまへものうエホバにゆんぜせべ我神のうの属なり、
われらの民の草庵のひじなり。感謝してしるの門にたり、ほめたまへしるの大庭にいれ
しでるの名をばたまへよ、エホバがみくらの眞實より世におよぶ人
第一百篇 感謝のうた

けれなり

一われ體假に無拘とをうたせ、エホバよ我なんちを讀うたせ、エホバ心をせぐべして全道をゆもら
ん、なんちうれの用わにまつたまふや、我は心やめてわの家うちもありかん。われわが耶前
にいやしき事をもかず。われ類くもの業をくひ。うのわびう我につかじ、解めてしらひ我よりすな
れもし惡きものを知ることをこのやす。五ひそかにうの友をうしるもの我これぞはうばん高公る眼また
驕れる心のもの我これぞの心じ。六眼の國のうらの忠なる者をみて之をわれどとも住ません。
全き道をあゆむ人のわれに事へん。七かくこそをす者のわの家のうちにはすひてす虚偽をいふのみ
りわの目前にたつてきを得じ。八われ朝不くこのく國のあしさ者じこと、今く滅じ。エホバの口より不義を
ふこな入者をこしべく絶隔かん。

一 エホバよわの御子事へまつらん エホバはわが心から離れてかひてあふる者をみたまつれ わがたまじ
 ひまつせりてエホバに事へまつらん エホバはわが心から離れてかひてあふる者をみたまつれ わがたまじ
 しめ給へり 我らへりねはくわらじ神よりおもてへての日のかむにて我をとりまつふあかれ、汝
 のよみの世々かぎりあし汝にじへ地の基をすたまへり天もめあんちの手もありこれら
 ひまつせりてエホバを謹めつけ、汝の衷をもすすへてのものよひのほか名をほめまつれ わがたまじ
 一 わの靈魂よエホバを謹めつけ、汝の衷をもすすへてのものよひのほか名をほめまつれ わがたまじ
 ひまつせりての疾をいやし、汝の生命とはろびよあがなふに離れてかうらせ、なん
 ひまつせりての恩恵をわすめしられ、汝の名をほめまつれ エホバはなんちがふすへての不義をゆる
 しるゝ者のために公義と審判にをもひたまへり エホバのれの作爲をイ
 ルの口ど嘉物にてあかじめたまふ、斯てあんち出でて黒のこくへ新になるなり エホバすて虜
 らるゝ者のために公義と審判にをもひたまへり エホバのれの作爲をイ
 カにましませり、恒にせひることをせめりて天の地よりあ離れてかうせしるの罪の量
 かをたのひて我ねら、我をわざらひたまふ、わらの不義のかびにあたひて離いたまへり エホバを
 かうもくみにエホバの賜ふるのあはれみがの大かじて天の地よりあ離れてかうせしるのわれらより怨
 さればたのひて我ねら、我をわざらひたまふ、わらの不義のかびにあたひて離いたまへり エホバを
 かはけたまふことひ東の西より遠きがひじ エホバの己をもみがん者をもはみたまふことひ父の
 カ語三〇八

をあらじエルサレムにてうの麗美をあらじひんの島なり かはる用にもふるの民もらるの國つて
 みたまへりこの伊國のあげきをく死にまだせれる者をさはなら イオシにてエホバの名
 ウノ四福音十章の新しくくられたる民をやをほめまへり エホバの聖所のたかき所よりみわして天より地
 の福音をかへりみ被等のいのりくらめしめたまへり エホバの榮光もてわらじめたまへり
 オシの供えの石をもよらじゆの塵をさへ愛しむ エホバの國のエホバの名をふる地のもるく
 まれたまへん、うりやオに思ひはこしたまふはめり、うのびだせる期すに來り なんら
 りされどエホバよなんちがふ水遣にまらへるの名によらず世にまらへん、くちにシオシを
 あんち我をもたげてあがはずて繪へり わの肺ひかたたける日影のでし、またわれの草のどく表れた
 くらふごくくに灰をくらひ、わの骨ものにう灰をくらひて、こひ皆がんの怨うて病にてよりてあ
 のごくくなれり わの仇ひねあ我をうしる、狂ひて我をせひるあるの我をほして誓ふ われの懼を
 鶴鷺のこくへ荒たる跡のふくらふのこくになりぬ 七 われ開てね公らすたよ友なくして屋蓋にをる雀
 れたり、われ種をくらふを忘れじにて、かの歎息のこゑによりてわの骨うちの肉につく われは野の
 むの日か煙のひへくえ、わの骨うちのひくへくえ、わの骨うちのひくへくえ、わの骨うちのひくへく
 蔽ひたまふあかれ、あんちの耳をわれあかたふけ我がよぶ日にすみやかに我にてたへたまへ 三 わの
 エホバよわの御子事へまつらん わが號の御前にいたらんこそ、わが號の日みかほを